

名倉英三郎教授と日本教育史研究

松 川 成 夫

名倉英三郎先生は東京の御出身で、暁星中学校から慶応義塾大学に進み、文学部哲学科で教育学を専攻された。在学中、小林澄兄博士の薫陶を受け、1943年（昭和18）9月に卒業、兵役に服し、戦後、教育書の編集・出版の業務、及び、二、三の学校での教職に従事し、1951年（昭和26）4月、本学に就任された。以来、36年間、教職課程の中心的存在として尽くされ、本年3月、定年を迎えて退職された。

先生の御専門は、日本教育史である。特に明治初期の教育については斯界における権威である。その業績については以下で述べるが、学風としては、広い文化的背景をもったところの実証主義ではないかと思う。歴史研究である以上、どこまでも事実在即し、事実に忠実であろうとするが、同時にその事実の背後にある精神的・文化的なものを重んずる態度である。それらのものに強い関心を払う。このことは多分、先生が若い日々を過ごされた時代がいわゆる古き良き時代であり、特に大学では、専攻外の優れた教授たちにも親しく接する機会に恵まれ、学問・芸術の香り高い環境のなかで、そのエッセンスを豊かに享受しつつ、同時に、教育学研究の基本を学ばれたからであろう。教育史の研究は、ある意味では大変地味であり、忍耐を要求されるものであるが、先生は常に水を得た魚のように、研究や調査に専心従事された。数々の優れた業績は、額に汗して苦闘すること無しには生み出すことはできないが、名倉先生の場合は、まわりの者には、研究じしんを楽しんでいるという面のみが見えたのは、先生の学究としての非凡な資質によるものであると思う。

本学に比較文化研究所が開設されて間もない頃、先生は研究員となり、「近代日本の教育制度の発達」の研究に着手した。そのテーマというのは、わが国の近代教育が欧米の教育制度や教育思想の影響下に形成され、発展してきたことは周知の所であるが、それが具体的にどこにどう現われているかを実地に当たって調べ、その第一段階として、「学制」発布（1872）前後の時代を取り上げ、基本的な研究文献の蒐集をするとともに、長野県をとりあげてひとつのケース・スタディを行なう、というものであった。そこで長野市の信濃教育会を振り出しに、松代小学校、松本市開智小学校、高遠小学校、上伊那教育会などを精力的に歴訪し、蔵書や資料を点検し、また各地の郡誌村誌の研究者（多くは小学校教員）をはじめ、土地の古老を訪問し、明治初年の教育事情の綿密な調査を行なった。特に、高遠小学校及びその近在の旧家に所蔵されていた資料に基づき、当地方における明治初年の教育事情についてのきわめて詳細で精緻な研究が進められた。高遠小学校は、高遠藩の学校であった進徳館に由来し、この藩校は維新前

にすでに洋学を取り入れ、英語教育を始めていた。このような精神的文化的伝統のあるところで、近代教育の出発点である「学制」がどのように実施されたか、その実施過程にみられる問題は何であったかを究明したのが「明治初期における小学校教育の成立過程——近代日本教育制度の発達——」（1957）という労作である。当時はまだコピーの便利がなかったので、大きな接写装置を常に持参し、文書を広げて上からカメラで一枚一枚撮影をし、それを持ち帰って、フィルムを暗室で現像し焼き付けをした。

こうして先生の教育史研究はスタートした。まもなく比較文化研究所の休暇研究の機会を得、長野市に居を移し、県内各地を隈なく歩き、資料蒐集に努めると共に、其の後の研究の中心となる地方教育史研究の基盤づくりが、この時期に着々と形成されたのである。とりわけ、「研成学校記」は、かつて高遠藩士であった高橋敬十郎が教えていた安曇郡穂高村の研成学校についての研究で、「比較文化」10・11・12号に発表されたが、高く評価された。その後、先生の地方教育史研究の範囲はどんどん広がり、全国各地に跨がるようになり、いまでは足を踏み入れない県は殆どないという。名実ともに地方教育史研究の第一人者である。

「学制」発布百年に当たり国立教育研究所で、「日本近代教育百年史」（全10巻・1974）が編纂されたとき、第3巻の明治維新期を担当し、府・藩・県における学校改革について執筆した。また神奈川県立教育センター編「神奈川県教育史」（全6巻）の「通史編・上巻」（1978）に明治前期の小学校・中学校・教員養成・社会教育全般の教育実態史を執筆し、さらに、長野県教育史刊行会による「長野県教育史」（全18巻）には、第1・2・3巻（1978・81・83）にわたって長野県の近世・近代初等教育を担当した。これらはいずれも膨大な資料を駆使しての文字どおり大変な労作であって、後世に残る記念碑的な事業といわれている。因みに、先生がこれらの書物に執筆した数編の論文は、合計すると優に千ページを越えている。近年は、「相模原市教育史」の監修者として同教育史編纂の全面的指導の責任に当たっておられる。また、先年来、文部省科研費による総合研究「地方教育史研究」及び「日本教育史資料の研究」を継続し、特に後者の成果として、昨年『「日本教育史資料」の研究』という浩瀚な著作を公けにされ学界に多大の裨益をされた。

以上のような数々のすぐれた研究業績の他に、「木村熊二日記」のような貴重な労作があることも忘れることはできない。この日記は、青山なを先生のご尽力により、比較文化研究所に所蔵されており、日本キリスト教史研究の重要資料である。研究所ではこれの復刻を計画し、先生が4人の卒業生の熱心な協力をえて日記の全文を復刻した。牧師であり、小諸義塾創設者であった木村熊二の、在米時代から帰国後の伝道活動・教育活動の日記（英文を含む）を刻明に訳読し、1981年に出版され、各方面の研究者から歓迎された。

教育学研究室で先生とご一緒に仕事をし、懇切な指導を受け、公私ともに親しくして頂いた者として心から感謝を申し上げ、一層の御健康・御活躍を切に願うものである。